

■ 屋根に葺かれた瓦

屋根が崩れた跡!?

講堂跡の発掘調査では、基壇が低くなる箇所では当時の形をとどめた軒瓦がまとまって出土しました。それはまさに、屋根に葺かれていた瓦がそのまま落ちた状況でした。

4つの軒丸瓦が並んで出てきましたが、その瓦の文様をみると全て違う文様で、お寺に最初に葺かれたものから、平安時代に葺かれたものまで様々でした。これは、屋根を修理した際に、使える瓦はそのまま使い、割れたりして使えないものを新しい瓦と交換したことを示しています。

今回の調査は幅 80cm 程度しか掘っていませんので、きっと、この周辺の土の中には屋根から落ちた瓦がそのままの状態に残っていることでしょう。将来の調査で大発見があるかもしれません!



写真8 軒瓦の出土の様子



図4 創建時に葺かれた軒瓦

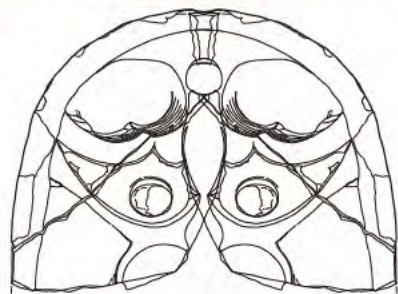


図5 創建時に葺かれた鬼瓦?

■ 『讃岐国名所図会』にみる江戸時代の法華寺跡

江戸時代の『讃岐国名所図会』には小さなお堂と礎石らしきものが描かれており、法華寺跡と記されています。

また、これには「境内も8町ばかりありて、塔美麗の大伽藍なりとぞ。天正年中失火に灰燼となりけり」とも記されており、当時の人々は露出した礎石の大きさや伝承などから壮大な法華寺跡を思い描いていたことが分かります。この礎石の一部は現法華寺境内に残っており、史跡地における位置関係や礎石の大きさや柱間の間隔などから金堂跡と推定されています。この金堂跡の南側に描かれている礎石はまだ確認されていませんが、中門もしくは南大門と考えられます。この解明は、今後の調査の課題の一つです。

江戸時代の頃

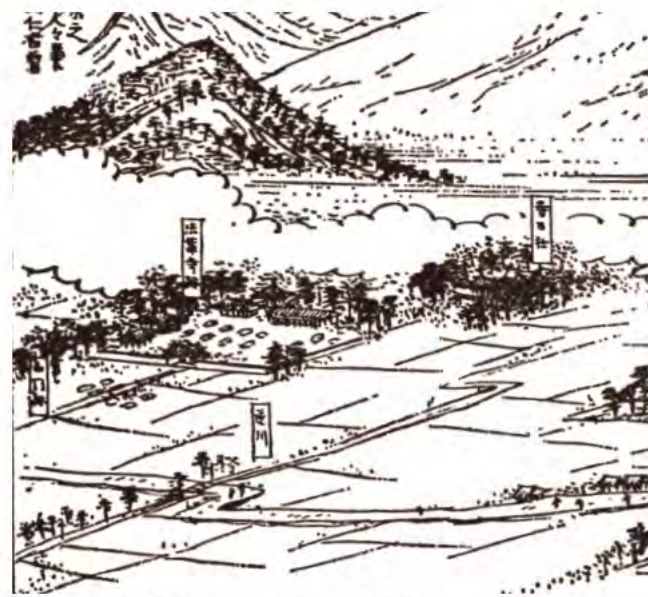


図6 『讃岐国名所図会』に見られる法華寺跡



むかしの高松

— 讃岐国分尼寺跡を探る —

第
29号

2016年3月



仏教の力によって国を治めるため、天平13(741)年、聖武天皇は全国に国分二寺を建立するように命じました。これが国分寺建立の詔です。正式には、国分寺(僧寺)は「金光明四天王護国之寺」、尼寺は「法華滅罪之寺」といいます。国の華と謳われたように、往時の建築・土木技術の粋を結集した最新の建築物として各地域に建立されました。



むかしの高松

— 讃岐国分尼寺跡を探る —

2016年3月
第29号

編集発行

高松市創造都市推進局文化財課

高松市番町一丁目5番1号 高松市埋蔵文化財センター
tel 087-823-2714

<http://www.city.takamatsu.kagawa.jp/22109.html>

■ 史跡讃岐国分尼寺跡とは

発掘調査のはじまり

讃岐国分尼寺跡は特別史跡讃岐国分寺跡の北東約2kmの位置に所在し、昭和3年に国の史跡に指定されています。

しかし、近年まで法華寺境内に残る金堂跡と考えられる礎石と発掘調査によってみつかった寺域の西側を区画する溝以外は、詳細は不明でした。

平成18年の市町合併以後、発掘調査を継続して行っており、特に、平成23～26年度にかけて実施した発掘調査によって尼房跡、講堂跡が見つかり、良好に建物跡が残っていることが判明しました。これは、全国でも珍しい事例と言えます。



図2 史跡讃岐国分尼寺跡の調査箇所



写真2 尼房跡(西側)の発掘調査

発掘調査で明らかとなった東西に長い建物は、金堂との距離や位置、建物の構造などから尼僧が生活した建物、尼房跡であると考えられました。讃岐国分寺跡でも僧房跡が確認されていますが、建物の長さは僧房跡のおよそ2分の1の規模です。



図1 讃岐国分尼寺跡とその周辺
「国土地理院発行の2万5千分1地形図(白峰山)の一部を掲載」

礎石!?

以前から、現法華寺境内の北側にある農地の畦に巨大な石が一定間隔で露出していることが知られていました。この巨大な石が建物の柱を支える礎石である可能性があり、調査を行うこととなりました。

その結果、建物の礎石であることが明らかとなり、東西に非常に長い建物であったことが分かりました。建物の東半分は後世の土採りによってなくなりましたが、当時の寺院の建物は多くの場合左右対称であることから、東西15間、南北3間(10.36m(35尺)×44.4m(150尺))の規模であったことが分かりました。



写真1 農地で露出していた石材



写真3 発掘調査で出土した礎石



写真4 加工されていた礎石

■ 往時の姿



写真5 講堂跡の礎石



写真6 破碎された礎石



写真7 残された根石(礎石を支える石)

往時の姿が今ここに

ここで紹介した4年間の発掘調査によって、史跡地の中央部に、金堂跡、講堂跡、尼房跡の往時の主要寺院の建物が非常に良好な状況で残っていることが明らかになりました。同時に、これらの建物は直線的に並び、全国の国分尼寺によく見られる建物の配置であったことも分かりました。

また、各建物の中心がそろっており、この中心を通るライン(中軸線)は当時の条里地割りと合うことも明らかになりました。このことから、当時の地割りに合わせてお寺の設計図が描かれて、建設が行われたことが明らかとなりました。

建物跡がよく残っていることから、建物の位置や規模などが判明し、この4年間の調査は重要な成果を挙げることができました。しかし、尼寺の範囲やその歴史については、まだまだ分からないことばかりです。

讃岐国分尼寺跡の調査はまさに始まったばかりなのです。

講堂跡!?

尼房跡の発見によって金堂跡と尼房跡の空間にもう一つ建物跡があった可能性が浮かび上がってきました。それが「講堂跡」です。

平成25～26年度にかけて、この講堂跡の存在について確認することにしました。25年度の調査では、建物西端の礎石列(3間分)がすべてそろって出てきただけでなく、軒瓦が屋根から落ちたままの状態出土し、めったに遭遇できない調査となりました。26年度も継続して調査を行いました。建物の東端は後世の改変により、礎石は他の場所に運ばれて見つかりませんでした。ただし、礎石の根石や抜き取り痕跡が残っており、建物規模は復元することができました。

この2回に及ぶ発掘調査によって、講堂跡と推定される建物が、東西7間(想定)の28.416m(96尺)、南北4間の13.024m(44尺)で、東西方向に長い非常に巨大な建物であることが明らかになりました。

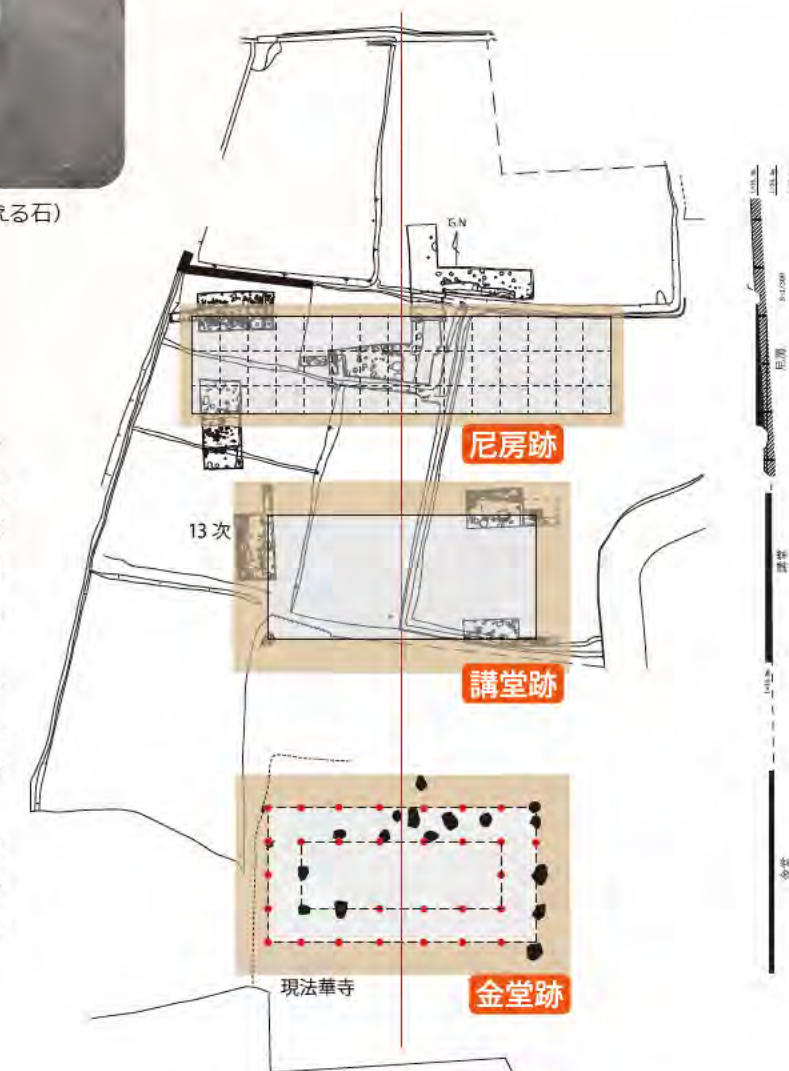


図3 伽藍配置及び基壇造成範囲(想定)(S=1/300)